

メリメ「タマンゴ」における黒人と白人

——黒人奴隷貿易をめぐる——

田 戸 カナ

はじめに

プロスペル・メリメ (1803~1870) が執筆した「タマンゴ」は 1829 年 10 月 4 日に『パリ評論』誌にはじめて掲載された、三角貿易の一辺をなす中間航路での黒人奴隷の反乱を扱った中編小説である。この作品はその後 1833 年に『モザイク』(H・フルニエ・ジュヌヌ書店刊) に収録されて出、次いで修正を加えられて 1842 年に『コロンバ, 続いてモザイク他中短編小説』(シャルバンティエ書店刊) に収録されて世に出た。『コロンバ, 続いてモザイク他中短編小説』は作者によって修正を加えられ、再版された。「タマンゴ」は 1837 年に『海のフランス』に「奴隷船上の反乱」(Une révolte sur un négrier) というタイトルのもと手を加えられて掲載されたが、この修正はメリメ自身の手になるものではない。「タマンゴ」の決定稿は『コロンバ, 続いてモザイク他中短編小説』に収められた 1850 年のテキストであるとみなされている。

これまでの研究ではメリメの数々の中編小説においては文明人と未開人が対照をなしていることが注目されている¹。「タマンゴ」においては文明と野蛮の対立が推し進められていることが指摘されている。GF-フラマリオン版「タマンゴ」(1983 年) の校訂者アントニア・フォンユイは「それ [=「タマンゴ」] は流行の主題をもとにして、文明と野蛮の終わりなき対立、すなわちメリメが一生気にかける対立のテーマを発展させている²」と断言している。しかし、「タマンゴ」においては文明と野蛮はどこまでも対立するものなのだろうか。本稿の目的はメリメと黒人奴隷貿易並びに黒人奴隷制との接点をつまびらかにした上で、「タマンゴ」の作品世界における黒人と白人のありようを分析しつつ作品内での文明と野蛮の関わりを明らかにすることである。

メリメと黒人奴隷貿易並びに黒人奴隷制

メリメは黒人奴隷貿易及び黒人奴隷制とどのような接点があったのかについては、「タマンゴ」のソースは何かというかたちで既に研究されてきた。「タマンゴ」研究はそのソースを特定することを中心に進んできたと言っても過言ではない。ソースは大きく、人物、書物そして物品に分類される。まず、人物から見ると、メリメは黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に何らかのかたちで関わる人、黒人奴隷貿易や黒人奴隷制に異議を唱える人と実際に交流があった。美術評論家エティエンヌ・ドレクリューズ (1781~1863) は王政復古期、毎週日曜日の 2 時から 5 時にシャバネ通り 1 番地の 6 階の部屋に人々を迎え入れていた³。この集まりにはスタンダールもしばしば顔を出したのであるが、メリメは 1825 年 3 月 13 日にこの集まりに出入りを許された。メリメはこの集まりの場で、1821 年 12 月にパリで設立された、黒人奴隷貿易廃止を目標の一つに掲げる「キリスト教道徳協会」の会員と会っていた。そればかりかメリメはここで、スコットランドに生まれるも 1818 年に渡米し、女性問題と黒人奴隷解

放運動に取り組んだ女性フランシス（ファニー）・ライト（1795～1852）に会ったと考えられている。また、メリメにはジャン＝オーギュスタン・マルクという、アンティル諸島から戻った海軍大尉の肩書きを持つ親類がおり、メリメは1828年4月頃この親戚に会うためにシェルブールまで行ったことが指摘されている⁴。さらにメリメは友人アルベール・スタプフェール（1802～1892）を介して、アルベールの父親フィリップ＝アルベール・スタプフェール（1766～1840）が毎週水曜日にジュヌール通り4番地の自宅で開いていたサロンに出入りするようになった⁵。フィリップ＝アルベールはスイスの大臣となったあと1800年に大使としてパリに派遣された人物であり、リベラルな思想の持ち主で、「キリスト教道徳協会」の創設時の会員の一人であった。「タマンゴ」のソースを研究したレオン・ヴィニョルはメリメが反奴隷制主義者であったトックヴィル並びにモンタランベールと交流があり、スタール夫人の長男オーギュスト・ド・スタール（1790～1827）から奴隷貿易の詳細を直接聞いた可能性がある⁶と述べている。オーギュスト・ド・スタールは「キリスト教道徳協会」内に設けられた「黒人貿易廃止のための委員会」の初代委員長である。一方、プレイヤー版『クララ・ガズル戯曲集 長中編小説』（1978年）の校訂者ジャン・マリヨンとピエール・サロモンはメリメがヴィクトール・シュルシェールと交流があった可能性を指摘している⁷。シュルシェールは周知のごとく、フランスの全植民地において奴隷制を全面的に廃止することを決定した1848年4月27日のデクレの発布に大いに尽力した人物である。

書物に関しては、イギリスの黒人奴隷制廃止論者トマス・クラークソン（1760～1846）の著作『ヨーロッパの住民に対するアフリカの叫び』（1822年刊）の仏訳、オーギュスト・ド・スタールがナント港で奴隷貿易、奴隷船に関して行った調査の報告書、奴隷を積んだ夜警号が1822年にイギリスの船舶に拿捕されたことを語る小冊子『ナントの奴隷船、夜警号事件』（1823年刊）、ジョゼフ＝エルゼアール・モルナ（1776～1830）の著作『黒人奴隷貿易・植民地奴隷制史概論』（1828年刊）をメリメが読んだこと、あるいは読んだ可能性があることが指摘されている。モーリス・パルチュリエはメリメは1825年2月22日にデュボワ宅でシャルル・ド・レミュザ（1797～1875）の戯曲『サン・ドマングのプランテーション』が朗読された時そこにはいなかったが、それでもこの戯曲を知ったにちがいないと考えている⁸。ミッシェル・クルゼはメリメがドレクリューズの家で『サン・ドマングのプランテーション』の朗読を聞いたと明言している⁹。ピエール・トラアールはシャルル・ド・レミュザの『サン・ドマングのプランテーション』、デュラス公爵夫人の小説『ウーリカ』、ユゴーの小説『ビュグ＝ジャルガル』が引き起こした黒人の流行を利用してメリメが「タマンゴ」を執筆したと断言している¹⁰。さらに、メリメが奴隷船での反乱を扱ったダニエル・デフォーの小説『シングルトン船長』（1720年刊）と、バルタザール＝マリ・エメリゴン（1716～1784）の著作『保険・契約論』の新版（1827年）を読んだ可能性も指摘されている。『保険・契約論』第12章第10節は「ニグロの死と反乱」と題されており、そこではフランスの植民地に向かう、33人の奴隷を乗せたブリガンチン、デスタン伯爵号のなかで黒人たちが反乱を起こし、白人を殺害したり負傷させたりした事件が語られている。この事件では一部の白人は別の船舶によって救助され、黒人を乗せた船はやがて座礁した。

「タマンゴ」のソースとして物品も無視できない。オーギュスト・ド・スタールはナント港で黒人奴隷を拘束する道具を数々入手し、それをパリに運んで展示したが、ジャン・マリヨンとピエール・サロモンによれば、メリメはこの展示をおそらく見たという¹¹。

このようにこれまで「タマンゴ」のソースのかたちでメリメと黒人奴隷貿易並びに黒人奴隷制との

接点が指摘されてきたが、これに関連して、メリメが「タマンゴ」発表以前にユゴーと知り合いであったこと、メリメとシャルル・ド・レミュザはともにドレクリューズ宅での集いのメンバーであったこと、さらにメリメと、黒人奴隷貿易反対の主張を繰り広げたバンジャマン・コンスタンとともにフィリップ＝アルベール・スタプフェール宅の集いのメンバーであったことを付け加えないわけにはいかない。

黒人の愚かさ

(1) 黒人たち

「タマンゴ」を読むと、黒人の愚かさが前面に押し出されていることに気付く。これまでの研究によって、メリメはトマス・クラークソンの『ヨーロッパの住民に対するアフリカの叫び』を読んでイギリスの著名な探検家マンゴ・パーク（1771～1806）が物して注目された『1795, 1796, 1797年のアフリカ内陸旅行記』（1799年刊）を知り、このマンゴ・パークの著作からヒントを得てママ＝ジャンボのエピソードを創作したことが判明している。マンゴ・パークの著作はジャン・アンリ・カステラによってフランス語に翻訳され1800年に出版されていた。この書物のなかでは、マンディゴ族の町にはマンボジャンボが所有する衣服のようなものがあり、夫か夫が指名した者は女たちを服従させるためにこの衣服を着て、道をあやまった女を指し示す儀式が語られている。指し示された女は捕らえられ、鞭で打たれるという¹²。

「タマンゴ」では通訳の水夫が船長ルドゥにママ＝ジャンボとは何かを説明する。通訳は自らの体験に基づいて、黒人女たちは、長い棒の先につけられ、白い布でくるまれ、中をくりぬいてろうそくの明かりがついたカボチャをママ＝ジャンボというお化けであると信じ込み怖がっていたと語る。黒人女のなかにはママ＝ジャンボを見て、不貞を夫に白状する者もいたという。これはアフリカの風習をフランス人読者に伝える語りである。「タマンゴ」という耳慣れないことばから異国人を想像し作品を読みはじめたエキゾチズムに関心のある読者は通訳の発話からアフリカの奇妙な風習を知ることができる。「タマンゴ」出版当時がまさにエキゾチズムの流行期であったことはここで改めて繰り返すまでもない。だが、ママ＝ジャンボについての語りの役割は遠い異国に対する読者の好奇心を満足させることに止まらない。この語りはただのカボチャを心底恐れる黒人女たちの愚かさを示すという役割もまた同時に担っている。なぜならば、メリメは通訳の水夫に次のように言わしめているからである。「私はママ＝ジャンボを見ましたよ。そして仕掛けが分かりました。ところが、黒人ときたら……。単純なので、何も分からないんですよ。[…] 黒人をだますには大いに知恵を絞る必要はありませんよ¹³。」実際にママ＝ジャンボと、ママ＝ジャンボを恐れる黒人女たちをその目で直に見た通訳の水夫のことばには説得力がある。

「タマンゴ」には黒人女一般だけでなく、船長ルドゥが率いる奴隷船に乗せられた黒人たちの愚かさも描かれている。船内での反乱をもくろむタマンゴは他の黒人奴隷たちに祖国に帰してやると言い、自分は魔術を知っていると自慢する。すると、船内にいる黒人たちはタマンゴのことばをそのまま信じる。「タマンゴは自分の考えをはっきりと説明せずに、彼らを故郷に連れ戻すことができるだろうと言った」とあるように、タマンゴは故郷への帰還の方策を明確に説明したわけではないのだが、それでも他の奴隷たちはタマンゴのことばをやすやすと信じる。タマンゴがいくら魔術を知っていると主張しているとはいえ、故郷へ戻るには船を操縦できる人が存在しなければならないし、それ相応の

船の燃料と食糧の蓄えもなければならぬだろう。「タマンゴ」にも「六週間以上¹⁴」という日数が示されているとおり、中間航路の航海は通常二、三箇月かかる大掛かりなものである。デイヴィッド・エルティスとデイヴィッド・リチャードソンの統計によると、1776年から1830年には、上ギニアからカリブ諸島までの航海日数は平均して44.6日、同じく上ギニアから英領カリブ諸島までの航海日数は平均して56.8日だったという¹⁵。しかしながら、船内の奴隷たちはこのような現実的な事柄を一切考慮せずに、祖国へ帰してやるというタマンゴの**ことば**を鵜呑みにする。船内の黒人たちを愚かと言わずに何と言ったらよいであろう。

このような黒人たちであるから、彼らはその後のある夜、奇妙な身振りを交えて訳の分からない**ことば**をつぶやくタマンゴを見て、悪魔がこの場に来ていると信じ込み震える。そしてタマンゴが精霊が約束を守ってくれたので、自由になるための道具を今持っていると言い、近くにいた奴隷たちにやすり鑪を触らせると、奴隷たちはタマンゴの**ことば**をまたもや信じる。タマンゴは実際には妻のエイシェから鑪をもらったのであるが、黒人奴隷たちはタマンゴが精霊から鑪をもらったと思う。この時、語り手は奴隷たちの愚かさを指摘するのを忘れない。「たくらみは粗野 (grossière) であったが、なお一層粗野な (grossiers) 人間たちには信用された¹⁶。」« grossiers » という単語をここでは「粗野な」と訳したが、この単語には「無教養な」の意もある。

語り手はタマンゴの**ことば**をいともたやすく信じる黒人たちの愚かな様子を描き出すだけでは満足せずに、黒人たちに自分たちは愚かであったと言わしめさえする。白人を一人残らず殺したあと、タマンゴを含め奴隷たちは誰一人として船を操縦できないことが判明する。この時、奴隷たちは自らが愚かであったことを悟る。黒人たちはタマンゴに向かって次のように言っている。

« Perfide ! imposteur ! [...] c'est toi qui as causé tous nos maux, c'est toi qui nous as vendus aux blancs, c'est toi qui nous as contraints de nous révolter contre eux. Tu nous avais vanté ton savoir, tu nous avais promis de nous ramener dans notre pays. Nous t'avons cru, insensés que nous étions ! et voilà que nous avons manqué de périr tous parce que tu as offensé le fétiche des blancs¹⁷. »

「裏切り者！　ぺてん師！　[……] お前がおれたちの苦しみの全ての原因だ。お前がおれたちを白人に売ったんだ。お前のせいでおれたちは白人に対して反乱を起こさなければいけなくなったんだ。お前はおれたちに知識を自慢した。おれたちを故郷へ連れ戻すと約束した。おれたちはお前の**ことば**を信じた。何ておれたちは馬鹿だったんだ！　その上、お前が白人の崇拜物を侮辱したから、おれたちはみな死にそうになったんだ。」

語り手は黒人たちに自らの愚かさを自覚させ、自分たちは馬鹿だったと告白させることにより、黒人たちの愚劣さを改めて白日の下にさらす。

もはや誰一人制御できない、マストが倒れた船の上で、生死の境にいる黒人たちがとる行動も賢さには程遠いものである。

反乱者のなかには泣く者もあった。両手を上げ、自分たちの崇拜物と白人たちの崇拜物に頼る者もいた。ある者は羅針盤の前にひざまずき、その絶えざる動きに感心し、故郷に連れ戻してほしいと羅針盤に頼んでいた。ある者は惨めにも落胆して、上甲板の上で身をかがめていた。

一人の黒人が喜びにあふれた顔をして蒸留酒の在り処を見付けたと言うと、黒人たちは食品庫に行

って酒を飲み、酔っ払って甲板で歌って踊る。そしてその日の残りとその夜をこのような状態で過ごす。その夜の中に多くの負傷者が死ぬ。翌日、生存者たちは会議を開くが、そこで頼りにされるのはまじないである。まじないは当然のごとく効力を発揮しない。その日もまた乱痴気騒ぎが繰り返される。一同は大海原のことも、奴隷制のことも、死が目前に迫っていることさえも忘れてしまう。「こうして幾日もが過ぎた。叫ぶ、泣く、髪の毛をかきむしる、それから酔っ払って眠る、これが彼らの生活だった。何人もが飲みすぎたために死んだ。海に身を投げたり、短刀で自害した者もいた¹⁸。」

ともに王政復古期における大西洋上での海難である点で、「タマンゴ」の奴隷船の漂流はメデューズ号の難破を彷彿させる。事実、ジャン・マリオンとピエール・サロモンは『クララ・ガズル戯曲集 長中編小説』(1978年)を校訂する際、「タマンゴ」のテキストの終わりのほうにあらわれる「弱者は死んだ。強者が弱者を殺したからではなく、死ぬがままにしたからだ」の箇所注をつけ、「このシーンはメデューズ号の難破(1816年7月2日)とジェリコーの有名な絵画(1819年)を思わせる¹⁹」と明記している。セネガル総督ジュリアン・シュマルツをはじめ、兵士や科学者らおおよそ400名を乗せたメデューズ号がセネガル沖で難破したのはメリメが十二歳の時、ジャン・マリオンとピエール・サロモンが言うように1816年7月2日のことである。この時、船に乗った人々は巨大な筏をつくり、おおよそ150名がこの筏に乗って約10日間にわたって漂流し、結果的にこのうち15名が救出された。しかし、メデューズ号に乗った人々とは異なり、奴隷船に乗った黒人奴隷たちは生き残るために知恵を働かせ皆で協力して筏をつくるといった工夫をしないどころか、漂流する船のなかで叫び、泣き、髪の毛をかきむしり、酔い、眠る、自殺するというありさまだったのである。

語り手は黒人奴隷たちの愚かさを暴き出すのをこれで止めはしない。先に見たように、奴隷船に乗った黒人たちはタマンゴの**ことば**を信じた自分たちは馬鹿だったと悟ったのであったが、その後彼らはまたしてもタマンゴの**ことば**を信じる。タマンゴが、夢にあらわれた精霊から奴隷たちを国へ帰す方法を教えてもらったと伝え、「[ランチとボートを]食べ物でいっぱいにするんだ。乗り込むんだ。そして風の方向に漕ぐのだ。おれの主人とお前たちの主人がおれたちの故郷のほうへ風を吹かせてくれるだろう²⁰」と言うと、「みんなは彼の**ことば**を信じた。」(On le crut.)しかも、語り手が指摘するように、「これほど馬鹿げた(insensé)計画はかつてなかった」にもかかわらずである。「On le crut.」という言い回しをそのまま見過ごすわけにはいかない。先に黒人たちは自らの愚かさを自覚する際にタマンゴに向かって「おれたちはお前の**ことば**を信じた」(Nous t'avons cru)と言っていたが、この黒人たちの直接話法の語りは時制が直説法複合過去から直説法単純過去、すなわち複合時制から単一時制に変化するものの、主語+直接補語人称代名詞+動詞« croire »の活用形のみシンプルな構文がそのまま維持され、語り手に引き継がれていることに注目したい。しかも、主語の« Nous »及び« On »はいずれも奴隷船に乗った黒人たちを、直接補語人称代名詞の« t' »及び« le »はいずれもタマンゴを指し示す。同じ構文は同じ愚行が同じように繰り返されたことを示していないだろうか。失敗から学ぶことなく、同じ愚行を繰り返してタマンゴの**ことば**をまたも信じた奴隷たちにはもはや死ぬことしか残されていない。

このように愚かな黒人たちはその感情までもが愚かさと無縁ではない。語り手は奴隷たちの驚きと絶望を形容するのに「間が抜けた驚き」(un étonnement stupide²¹)、「間が抜けた絶望の表情」(expression de désespoir stupide)という具合に、わざわざ« stupide »という単語を選んでさえている。

(2) タマンゴ

語り手はタマンゴを黒人たちのなかで知識がある人物として提示している。「タマンゴは他の者ほど無教養 (grossier) ではなかったので、自分が困難な立場にあることをより感じていた²²。」「結局のところ、タマンゴが一同のなかで一番の物知り (le plus savant) だった。彼だけが自分が投げ入れた恐ろしい状況から一同を救い出す可能性があった²³。」しかし、その主人公タマンゴにしても幾度も愚かさを露呈する。タマンゴの愚かさはルドゥ船長との商談が始まる前から既に示されている。タマンゴは白人の船長を迎えるために着飾っていたのだが、彼はシャツを着ずに伍長の古い青い軍服を着て、ギニア産の布でできたパンツをはいていた。軍服は丈が短かったので、軍服とパンツの間に黒い肌が露出していた。タマンゴは脇に騎兵隊の大きいサーベルを紐でぶら下げ、イギリス製の立派な銃を手を持っていた。このようないでたちのタマンゴは「パリやロンドンの申し分のない伊達男を優雅さでしのいでいると信じていた²⁴」。だが、このような身なりのタマンゴが「パリやロンドンの申し分のない伊達男」よりも優雅であるはずはなく、はなはだしい勘違いをしているタマンゴに愚劣さを見て取ることは決して困難ではないだろう。

船長ルドゥとの取り引きがはじまっても、タマンゴは痴愚をさらけ出す。ルドゥは酒を飲めば飲むほど要求を増やしていったのに対して、タマンゴは酒を飲めば飲むほど要求を減らしていった。タマンゴは奴隷商人でありながら、奴隷の価値をどんどん引き下げていったわけである。そうであるからには、タマンゴを賢い奴隷商人と呼ぶことは到底できないだろう。

取り引きの最終局面でタマンゴは決定的な愚行を重ねる。彼は妻のエイシェが自分の意向に逆らったのが気に食わず、エイシェをルドゥに無償で与えてしまう。その後は草の上に寝転がって、酔いを醒ますために眠る。18世紀後半から王政復古期にかけてのフランスではアフリカの社会は一夫多妻が認められていると考えられていたようである。ジャン＝フランソワ・ド・サン＝ランベール (1716～1803) の短編小説「ズィメオ」(1769年刊) においては黒人主人公は次のように語っている。「あなたもご存じのように、私たちの最初の妻は私たちの真の妻です。他の妻たちはその召し使いでしか、私たちの慰みの対象でしかありません²⁵。」ジャン＝フランソワ・ビュティーニ (1747～1805) の小説『アフリカの手紙』(1771年刊) においても黒人主人公アバンサールはフェディマに「私は風習によって地位ある者と富める者に容認されている、何人もの妻をめとる権利を喜んで放棄します²⁶」と書き送っている。ロジェ男爵 (1787～1849) による小説『クレドール』(1828年刊) の「ロジェ男爵の前書き」においては、セネガル川左岸の地域では一家の主は複数の妻をめとっていることが示されている²⁷。実際、主人公クレドールの父親の友人であり、クレドールの教師でもあるピラン＝レには二人の妻がいる²⁸。黒人社会において一夫多妻が認められていることは、既に15世紀にはヨーロッパ人の目に留まっていた。ポルトガルの航海王子エンリケの援助を得て1455年から西アフリカ沿岸を探検したヴェネツィア商人アルヴィーゼ・ダ・カダモスト (1432～1488) の著作『航海の記録』(1468年頃執筆、1507年刊) には現在のセネガル川であると考えられる「セネガ河」流域の「セネガ王国」について次のように記されている。「王は妻を何人でも、自分の望むだけ、もつことができる。首長たちも一般の男も同様の権利をもっているが、いずれの場合にも、男が扶養できる範囲内に妻の数はとどめるものとする。従って王はいつも三十人以上の妻をもっている²⁹。」『航海の記録』はラテン語訳、ドイツ語訳、フランス語訳も出版され、16世紀、17世紀に広くヨーロッパで読まれた。フランス語訳は1515年にパリで出版されたため、フランスでは16世紀はじめには、黒人社会は一夫多妻を認め

ていると考えられていた可能性がある。メリメもご多分にもれず黒人社会に一夫多妻を採用している。そのため、タマンゴには二人の妻がいる。だが、いくら二人の妻がいるとはいえ、妻を一人、奴隷として無償で白人に与えるとは愚かしいにも程がある。

タマンゴは目覚めると、自分がエイシェを白人にプレゼントしたと聞き、船を追いかけるのであるが、この時のタマンゴの勘は正しかった。なぜならば、川は何度も迂回しているのだから、近道をして小舟を使えば船に追いつき乗れると予想していたとおり、彼は小舟を使ってルドゥの船に追いつき乗り込むことができたからである。「彼は間違っていなかった³⁰。」しかしながら、乗船に成功したタマンゴは再びその愚かさを露呈する。船長に促されるままに、所持していた小銃を手渡してしまい、その上サーベルを航海士に触らせ取り上げられ、その結果、捕らわれて奴隷の身に墮するからである。タマンゴは船長と航海士の策略にいと簡単にめられたわけである。これによってタマンゴの愚かさはいや増すばかりである。このように見てくると、奴隷船に追いつくための彼の正しい判断はむしろ、船上での彼の間抜けさを描き出すために導入されたとさえ言えるだろう。

反乱の首謀者となり、白人たちを皆殺しにすることに成功したヒロイックなタマンゴにも愚かさは付いて回る。何とか船を操縦しようとするタマンゴを描き出すのに、語り手は敢えて「無知」ということばを使用している。「ついに、恐怖と、無知 (l'ignorance) からくる自信があのように交ざり合っ

てタマンゴは舵輪を一回激しく動かした。[...] 帆船は怒って、無知な (ignorant) 操縦者もろとも波に飲み込まれたがっているようだった³¹。」

ランチとボートに食料を積んで乗り込み、風が吹く方向に漕いで祖国に帰ろうとタマンゴが提案し、語り手はこの計画をこの上なく「馬鹿げた」ものであるとしていたことは先に見たとおりであるが、しかし、タマンゴにとってはこの計画は全く「馬鹿げ」てはいない。

D'après ses idées, il s'imaginait qu'en ramant tout droit devant lui il trouverait à la fin quelque terre habitée par les noirs, car les noirs possèdent la terre, et les blancs vivent sur leurs vaisseaux. C'est ce qu'il avait entendu dire à sa mère³².

タマンゴの考えによれば、まっすぐ前に漕いでいけば、黒人の住むどこかの陸地が最終的には見付かるだろうとのことだった。というのも、黒人は陸地を所有しており、白人は船の上で暮らしているからである。これはタマンゴが母親から聞いたことである。

この引用のはじめの箇所を敢えてフランス語に忠実に訳すと、「タマンゴの考えによれば、彼はまっすぐ前に漕いでいけば、黒人の住むどこかの陸地が最終的には見付かるだろうと思っていた³³」となる。つまり、「彼は [...] と思っていた」という主語そして述語がありながら、なおかつこれに「タマンゴの考えによれば」ということばが付け加えられている。こうすることによって語り手はタマンゴの世界地理観が、彼独自の世界地理観であることを強調していると言える。

当時のヨーロッパ人の世界地理観に照らすと、タマンゴの世界地理観の特徴が際立つ。ヨーロッパでは既に17世紀にはオーストラリア大陸及び太平洋の島々について知られていたが、18世紀後半から本格的な太平洋探検のプロジェクトが実行に移された。イギリスではジョン・バイロン (1723~1786) が1764年から1766年にかけて、サミュエル・ウォリス (1728~1795) が1766年から1768年にかけて、ジェームズ・クック (1728~1779) が1768年から1771年、1772年から1775年、1776年から1779年の三回にわたって太平洋を船で探検した。この折に太平洋の多くの島が発見、再発見され、

地図に正確に記入された。フランスでもブーガンヴィル (1729~1811) がルイ 15 世の支援のもと 1766 年から 1769 年にかけてブドゥーズ号で世界一周航海を成し遂げ、数々の島を発見した。この後 1785 年 8 月 1 日にはルイ 16 世の後ろ盾を得てラ・ペルーズ (1741~1788) がアストロラブ号とブソル号を率いてブレスト港を発ち、太平洋探検を引き継いだ。ラ・ペルーズ一行が 1788 年に行方不明になると、ダントルカストー (1737~1793) がラ・ペルーズを捜索するために 1791 年 9 月 28 日にブレストを出港した。この航海ではラ・ペルーズを見付け出すことはかなわず、ダントルカストーも途上で死亡したが、科学的調査が行われ、調査結果は生存者によってヨーロッパに持ち帰られた。

この航海のあと、太平洋の探検はナポレオン戦争などの影響で一時行われなくなるが、「タマンゴ」が発表された王政復古期に再開された。1817 年から 1820 年にかけてはルイ・ド・フレシネ (1779~1842) によってウラニー号での世界一周航海が成し遂げられた。この折にオーストラリア、南洋での科学的調査が行われた。1817 年から 1820 年のフレシネによる世界周航にウラニー号の副長として同行したルイ・イジドール・デュペレー (1786~1865) は 1822 年 8 月 11 日にコキユ号の艦長としてジュール・デュモン・デュルヴィル (1790~1842) を従えて太平洋の科学的探検の航海に出た。1825 年まで 32 箇月間続いたこの航海は一人の死者も出さず、科学的調査の成果も大きかった。この探検の体験と科学的成果は執筆され、1825 年から 1830 年にかけて全 7 巻で出版された。1826 年から 1829 年にかけてはデュモン・デュルヴィルがアストロラブ号の艦長として派遣された。この探検は海岸線の形状を明確にしたり、島々の正確な位置を特定したり、動植物の資料を得るなど、大きな科学的成果を収めた。

これらの大規模な探検及び調査、とりわけクックとブーガンヴィルの探検の成果は注目を集め、専門の学者だけでなく、一般のフランス人にも知られるところとなった。「タマンゴ」が発表された王政復古期のフランスではほぼ継続的に太平洋の調査が行われており、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、カリブ海の島々に加えて太平洋の島々のことまでも知られていたわけである。当時のフランス人たちの科学的調査に基づいた世界地理観に照らせば、「黒人は陸地を所有しており、白人は船の上で暮らしている」というタマンゴの世界地理観は殊の外奇妙であり、滑稽でさえある。タマンゴは世界地理観に関してもその愚かさをさらけ出す。

「タマンゴ」の冒頭ではルドゥが有能な船乗りであると同時に勉学熱心であることが語られている。彼は獲得した財産を書物を購入して研究することに費やした。「数回の拿捕によって得た金のおかげで、彼は書物を買ひ、航海の理論を学ぶことができた。」(L'argent qu'il retira de quelques prises lui permit d'acheter des livres et d'étudier la théorie de la navigation³⁴) この引用箇所では「書物」は « des livres » というように複数形であり、彼が複数の書籍を購入して勉強したことが分かる。当時、書籍は今日よりも比較的高価だったことを考慮すると、ルドゥの勉強熱心は重みを増す。このように白人ルドゥが勉強熱心な人物として設定されているだけにいっそう、タマンゴを含む黒人たちが愚かなことは際立つ仕組みになっている。

(3) 叫び

ところで、「タマンゴ」の世界では口から発せられることばが大いなる力をもっている。奴隷取り引きの最中にタマンゴに銃口を向けられた老人は、エイシェがタマンゴの腕を動かしたために弾がそれたおかげで命を救われる。エイシェはなぜこの老人を助けたのか。それはエイシェがこの老人は

「彼女は女王になるだろうと予言した³⁵」魔術師であることが分かったからである。この老人は以前自らが発したことばによって一命を取り留めたわけである。彼は通訳の水夫のおかげで解き放たれる。

先にママ＝ジャンボというつくりもののお化けを信じる黒人女たちの愚かさについて考察したが、「ママ＝ジャンボ」ということばはただそれだけで威力がある。なぜならば、「白人の国にはママ＝ジャンボはいないと思っているのか³⁶？」とタマンゴが言うと、「エイシェは泣き崩れ、この不可解なことばのせいで身動きができないように見えた」からである。エイシェはママ＝ジャンボを目で見ずとも、ママ＝ジャンボということばを耳で聞いただけで動揺する。また、甲板にあらわれたタマンゴの前に走り寄ったエイシェが「許して、タマンゴ、許して³⁷！」と言ったのに対して、タマンゴは「鑪！」(Une lime!) と言おう。「船長は二人が交わした短いことばの意味を全く疑わなかった」のであるが、「鑪！」ということばの意味を理解したエイシェがあとで鑪をタマンゴに渡したためにタマンゴは他の黒人たちとともに反乱を起こすことができた。語り手は「この道具にこそ陰謀の成功がかかっていた³⁸」と語っているが、反乱の成功は一本の鑪という道具と同時に、「鑪！」という一言にもかかっていたのである。

このように「タマンゴ」では口から発せられることばが大いなる力を発揮するが、その一方で、同じく人間の口から発せられながらも、非言語である叫びもまた重要な要素となっている。白人が全員死に、もはや誰も船を操縦できなくなると、黒人たちは叫ぶ。「ニグロたちはおびえて、恐怖の叫び声を上げながら昇降口の下に逃げた³⁹。」「この知らせにこれらの不幸な者たちの叫びは一瞬止んだ。」「叫ぶ、泣く、髪の毛をかきむしる、それから酔っ払って眠る、これが彼らの生活だった。」「タマンゴは言った。『[…] 叫んでいるこの女たちと子供たちがかわいそうだ⁴⁰。[…]』」「帆船に打ち捨てられた数人の不幸な者のうめくような叫びがまだ聞こえていた。」

主人公タマンゴは叫ぶ人物である。タマンゴはエイシェを取り戻すために奴隷船に乗り込んだものの、ルドゥはエイシェを返すことを断固として拒否する。この時のタマンゴの反応は、叫びである。「すると、気の毒なことにタマンゴは大泣きし、そして外科手術を受けるかわいそうな者と同じくらい鋭い苦悩の叫び声を上げた⁴¹。」エイシェを取り戻せなかったばかりか、所持していた武器を取り上げられ手足を縛られたタマンゴは再び叫ぶ。「タマンゴは抵抗しながら激怒の叫び声を上げ」た。妻のエイシェがしゃれた服を着てルドゥに酌をしようとしているところを見たタマンゴは「一声叫⁴²」ぶ。タマンゴは意に沿わない現実と直面すると叫ぶのである。ある夜、身振りを交えて訳の分からぬことばを発し、悪魔と会話しているかに見えたタマンゴについては先に触れたが、タマンゴはこの時叫び声をも発していた。「次第にタマンゴは勢いづき叫び声を上げた⁴³。」そして彼はこの奇妙な行為を叫びで締めくくる。「タマンゴは喜びの叫び声を上げてこのシーンを閉じた。」船での反乱はタマンゴの叫び声に始まる。通訳の水夫はプール族の方言を理解できないのであるから、反乱の開始はこの方言を使って告げられてもよいわけである。しかし、タマンゴは言語ではなく、「大きい叫び声」で反乱の開始を合図する。そして彼はルドゥにとどめを刺す際には勝利の雄叫びを上げる⁴⁴。

ところで、「cri」(叫び)ということばは動物の鳴き声に対しても用いられる。辞典『フランス語大ロベール』には「cri」の意味として「Son vocal émis par les animaux et variant avec les espèces⁴⁵.」(「種によって変化する、動物が発する声の音」)と記されている。とすると、叫び声を上げる船上または船内の黒人たち及びタマンゴは動物のように立ちあらわれてきはしないだろうか。実際に当時、黒人はサルに近いという見方があった。オランダ人ピーテル・カンベル(1722～1789)はアム

ステルダム大学、フローニンゲン大学で解剖学や外科などの教鞭を執り、1766年にはフローニンゲン大学総長となったばかりか、医学、古生物学、地質学などの分野で優れた業績を残した、当時から知られた医師、解剖学者であるが、彼は顔面角という測定方法を発明し、それによってヒトの知能を決定しようとした。そしてカンベルはアフリカ人の顔面角はヨーロッパ人の顔面角よりもサルの顔面角に近いと結論付けた。この結論に影響されて人々はやがて、アフリカ人の顎はアフリカ人の動物的性質をあらわしていると考えられるようになる。黒人はサルに近いとする見方は「タマンゴ」が発表された時代のフランスにも息づいていた。ジュリアン＝ジョゼフ・ヴィレは1775年に生まれ、1846（47）年に亡くなったフランスの医者かつ生理学者であるが、彼の著作に『人類博物学』がある。これは1801年に2巻本で出版されたあと、大幅に加筆され、1824年に3巻本の改訂版が出版された。1824年版『人類博物学』の第3部第3項「ニグロ独特の形態、ニグロと白人及びオランウータンとの比較について」のなかでヴィレは次のように書き記している。

というも、ニグロは突き出た顔、狭小な頭蓋骨同様、内外の構造からして明らかにオランウータンに近いからである⁴⁶。

1824年はダーウィンが進化論をロンドンのリンネ学会で公表したあと『種の起原』を刊行する34、5年も前である。

「タマンゴ」においては、船上の黒人たちと主人公は何度も動物にたとえられている。「タマンゴは[……] 畏にかかった猪のように体を動かした⁴⁷。」「船長ルドゥの健康法の一つは、長い航海に向けて船に積み込んだ馬に足踏みをさせるのと同じように奴隷たちをしばしば踊らせることであった。」「タマンゴは故郷の豹（panthères）と同じくらいすばしっこかった⁴⁸。」猪、馬、豹。いずれの場合もタマンゴを含む黒人は比較的大型の四つ足動物にたとえられている。タマンゴを含む黒人たちの愚かさを考察したあとでは、彼らが上げる叫び声は彼らの動物的愚かさを示しているように思われる。黒人たち及びタマンゴの愚かさは叫びという行為によって裏付けられるのである。

逆転現象——無力の露呈

これまで「タマンゴ」においては主人公を含む黒人たちが愚かな存在として描かれているのを見てきたが、特筆すべきことに、「タマンゴ」の世界ではその愚かな者たちが生き残り、勉学熱心で、商売上手で、黒人をだまし、船を操縦する術を知っている賢い白人たちが死ぬ。たしかに、イギリスのフリゲート艦ラ・ベロヌ号に発見された時、奴隷船上に生き残っていたのはタマンゴただ一人であったが、黒人たちは船上で白人を皆殺しにすることに成功したのだった。愚かな者が生き残り、賢い者の命が絶たれる。これを支配される者が生き残り、支配者が死ぬと言い換えることもできよう。中間航路においては白人は黒人を商品として扱い、黒人は鎖につながれ白人に監視される。いわば白人は支配者であり、黒人は被支配者だからである。支配される者が支配する者を消し去る。「タマンゴ」ではこのような逆転現象とでもいうべき現象が多々起きている。

主人公タマンゴにしてからが逆転の人生を歩んでいる。タマンゴは元々、黒人を白人に売る奴隷商人であったにもかかわらず、一転して自身が奴隷となる。しかし、彼の身に起きる逆転はこれで終わりではない。奴隷となった彼は乗船した白人が全員殺されたことによって、今度は自由の身となる。しかも、彼の自由はジャマイカに着いたあとで法的に保証される。奴隷商人から奴隷に、そして奴隷

から自由の身に。タマンゴの人生は逆転を繰り返す人生である。

もう一人の主人公ルドゥの人物像も逆転と密接に関わっている。そもそもルドゥという名前が注目に値する。「ルドゥ家の人間は辛抱強くないんでね⁴⁹」とルドゥ自身が出ているからには、「ルドゥ」は船長のファーストネームではなく、ファミリーネームであると考えられる。アルベール・ドザの著作『フランス姓名語源辞典』によると、「Ledoux」は「doux」に冠詞の「le」が付いた名前であり、この名前は広く使用されているという⁵⁰。さらに、「doux」は出身地あるいは「doux」という性格に基づくあだ名を示しているという。つまり、船長の姓「Ledoux」は「doux」という性格から来ている可能性があるということである。形容詞「doux」を『フランス語大ロベール』で引くと、人物に対して用いる場合には「Qui ne heurte, ne blesse personne, n'impose rien, ne se met pas en colère⁵¹」（「誰の感情も損なわず、誰も傷付けず、何も押し付けず、怒らない」）と書いてある。これを短い日本語であらわすと、「穏やかな」、「温和な」、「優しい」、「大人しい」ということになるだろう。ところが、ルドゥは穏やか、温和であるどころか、優しく、大人しいどころか、極めて気が荒い横暴な人間である。ルドゥは鞭を所持しており、大声でしゃべりながら鞭を打ち鳴らす。

disait le capitaine d'une voix de tonnerre, en faisant claquer un énorme fouet de poste⁵²

船長は駟馬車用の大きな鞭を鳴らしながら、雷のような大声で言った。

Aussitôt après, la grosse voix de Ledoux jurant et menaçant, et le bruit de son terrible fouet, retentirent dans tout le bâtiment⁵³.

すぐあとで、ののしり、脅すルドゥの大声と彼の恐ろしい鞭の音が船中にとどろいた。

語り手がここで鞭を「大きな」、「恐ろしい」と形容している点も注目に値する。のみならず、ルドゥは暴力を振るう人間である。

愛撫も殴打さえも [...] 美しい黒人女を従順にすることはできなかった。

船長はエイシェをこっぴどく叱り、何回か平手打ちを食らわせさせた。

船長は「温和な」という意味をもつ名前を名乗りながらも、大声を上げ、鞭を操り、暴力を振るう。ルドゥという人物のなかで逆転現象が起きている。

ところで、ルドゥは左手のない人間である。トラファルガーの戦いの最中に木の破片で左手を打ち砕かれ、切断手術を受けたのだった。読者はここにも逆転現象を見て取ることができる。というのも、黒人奴隷制度下においては手足を切断されるのは白人ではなく、決まって黒人だからである。1685年3月にルイ14世によって発せられた「黒人法典」の第38条には以下のように定められている。「主人が裁判所に告発した日から一箇月の間逃げた逃亡奴隷は両耳を切られ、片方の肩に百合の花の焼き印を押される。もし同様に告発の日からもう一箇月の間再び同じ犯罪を犯すと、逃亡奴隷はひかがみを切断され、もう一方の肩に百合の花の焼き印を押される。三回目には逃亡奴隷は死刑に処せられる⁵⁴。」1685年3月のルイ14世の王令は修正を加えられ、1724年3月にわずか13歳のルイ15世によって再び発せられた。上に引用した1685年3月の王令第38条は1724年3月の「黒人法典」第32条に同じ文言で引き継がれている。このように、黒人の身体を切断することは法によって認めら

れていたわけである。

しかし、植民地において黒人奴隷は「黒人法典」の規定に従わないかたちで手足を切断されることもあった。1784年12月3日にはルイ16世によって西インド諸島のプランテーションに関する王令が再び発布されている。その王令では奴隷の手足を切断したプランテーション経営者らは厳罰に処せられることが明記されている。第5節第2条と第3条には黒人の手足を切断させたプランテーション経営者らは初犯の時は2千リーヴルの罰金を科され、再犯の場合は奴隷の所有を認められずにフランスに送還され、不名誉となることが明記されている。この厳しい規定は奴隷主が奴隷の手足を切断する行為が頻繁にあったことを示していよう。ヴォルテールのコント『カンディード』(1759年刊)第19章には右手と左足のない黒人奴隷があらわれないだろうか。彼は挽き臼に指を挟まれ手をなくし、逃げようとしたために足を切られたのだった⁵⁵。また、サン＝ランベールの「ズィメオ」では女主人公エラロエの父親マトンバは白人主人がエラロエに言い寄ったために白人主人に恥ずかしさを悟らせようとして、足を切断されたのではなかったか⁵⁶。しかるに、船長ルドゥは白人でありながら、黒人奴隷と同じように手を失っている。黒人と同じ目に遭っている。

二人の主人公、つまりタマンゴとルドゥが意志の疎通を図る上で重要な役割を果たす作中人物である通訳の水夫もまた逆転現象と無縁ではない。この通訳はヨロフェ語を少々知っており、タマンゴとルドゥの取り引きの際にはフランス語をヨロフェ語に、ヨロフェ語をフランス語に訳すのであるが、肝心なところで通訳としての能力を発揮できない。タマンゴがエイシェに「鑪！」と言った時、通訳はその近くにいなかった。そのため、このことばを通訳することはできなかった。また、タマンゴが船内の他の黒人たちに反乱を呼びかける際にも通訳は役立たない。なぜならば、アントニア・フォンユイによれば、プール族のことばはセネガルとカメルーンで話されているといい⁵⁷、ミッシェル・クルゼはプール族の方言は西アフリカで広く使われていたと明言しているが⁵⁸、タマンゴはプール族の方言のみを使って黒人たちに話しかけており、通訳はこの方言を理解することができなかったからである。通訳は通訳できないという矛盾に陥っている。

この作品においては作中人物だけでなく、奴隷船もまた逆転現象を見せる。ルドゥは自ら造船を指揮し、出来上がった船を「希望号」(*l'Espérance*)と名付けたのだった。「希望号」という船の名前はただそれだけで注目に値する。ジャン・マリオンとピエール・サロモンは、ナント港には「*L'Espérance*」という名の奴隷船は当時存在しなかったが、「*L'Espoir*」(希望号)という名前の奴隷船(ブリッグ)は実在していたことを指摘している⁵⁹。「タマンゴ」は歴史的事実を反映しているわけである。しかし、この船名が注目に値する理由は他にもある。ダントルカスターはラ・ペルーズを捜索するために1791年にブレスト港を発ったが、この時彼が率いていた船は「捜索号」(*la Recherche*)と「希望号」(*l'Espérance*)であった。ルドゥの船は大探検をした船と同名であるという栄誉に浴している。ダントルカスターはこの遠征中にオセアニアの多くの島を探検し1793年に亡くなり、1808年にはダントルカスターの探検に同行したロセルによって『ラ・ペルーズ探索に派遣されたダントルカスターの旅』が出版されている。メリメがダントルカスターの船の名前を知っていて故意に自作に取り入れた可能性もある。ともかく、ルドゥが奴隷を通常よりも多く積み込むために工夫して造った「希望号」は船長の希望をかなえるところか、船長の命を奪う場となる。「希望号」という船名は命名者からすれば皮肉な名前に転じてしまう。

これまで、作品が見せる逆転現象について考察してきたが、注目すべきことに、この逆転現象に付

随してさまざまな無力が明らかになる。白人を皆殺しにしたあと、愚かな黒人たちはタマンゴを除いて生き残る力をもたない。先に見たように、愚かなタマンゴは奴隷商人から奴隷に転じたわけであるが、この際に明らかになるのが夫としての彼の無力である。タマンゴは妻のエイシェを取り戻すために奴隷商人として希望号に乗り込んだのだ。しかし、白人にだまされて武器を取り上げられ、奴隷にされてしまう。奴隷となった以上、妻を取り戻すことはもはや不可能である。船上での反乱が成功に終わり、白人が全員死んで、タマンゴは奴隷から自由の身になるが、ここでもタマンゴの無力があらわになる。彼が今度見せるのはリーダーとしての無力である。というのも、タマンゴは反乱のリーダーでありながら、船を操縦できず、他の黒人たちを故郷に帰すことも、他の黒人たちの命を救うこともできないからである。

「タマンゴ」の世界では愚かな黒人たちばかりでなく賢い白人たちも無力を露呈する。ルドゥは勉学熱心で航海術を知っているが、殺害される。船長として船員を助けることができないルドゥは船長としての無力を露出する。通訳の水夫がタマンゴが口にした「鑪！」ということばとプール族の方言を通訳できず、通訳としての非力をさらけ出すのは言うまでもない。

無力を見せる主人公たちが乗った希望号もまた無力である。なぜならば、希望号は奴隷船でありながら、植民地に奴隷を一人も運び込むことができないからである。また、希望号に関連して明らかになるのはイギリス人の無力である。ロンドンでは1787年にトマス・クラークソン、グランヴィル・シャープら12名によって「奴隷貿易廃止協会」が設立されていた。この後イギリスでは奴隷貿易廃止運動は全国的に展開されていった。このような長年の努力が実を結び、イギリスでは1807年に奴隷貿易廃止法案が成立した。それを受けて有志のメンバーから成る「アフリカ協会」は1807年に第一回目の総会を開き、奴隷貿易廃止法が遵守されているかを監視することのみならず、諸外国にも奴隷貿易を止めさせることを目的の一部として定めた。1807年の奴隷貿易廃止法案の成立以降、イギリス政府も、他の国々にも奴隷貿易を廃止させることを政策として打ち出した。そして各地に巡洋艦を派遣し、奴隷船を取り締まることに力を入れはじめた。フランス王政復古期にはイギリスはアフリカの海岸などでフランスの奴隷船を実際に取り締まっていた。バンジャマン・コンスタンは黒人奴隷貿易廃止を求める演説を王政復古期に下院で複数回行っているが、彼はそのなかでフランスの奴隷船がイギリス人に捕まることを問題にしている。1822年4月5日のコンスタンによる議会演説には次の一節がある。

ある時は海賊行為のかどで告発し、またある時は植民地の商人との共謀を想定して、イギリス人は我々の船舶を逮捕し、押収し、彼らの港に連行して裁きかけます⁶⁰。

「タマンゴ」においてもイギリスによる奴隷船の取り締まりがはじめから問題になっている。テキストのはじめのほうでは次のように語られている。「黒人貿易が禁止され、黒人貿易を行うにはフランスの税関吏の監視の裏をかくだけでなく […], より危険なことだったが、イギリスの巡洋艦から逃れなければならなくなった時、ルドゥ船長は黒檀商人にとって貴重な人間となった⁶¹。」しかしながら、イギリスの巡洋艦は希望号を発見できない。「ルドゥはジョアール川（だと思ふ）に、イギリスの巡洋艦が岸のこの辺りを監視していない時に投錨した⁶²。」「船長は既にイギリスの巡洋艦については心配がなく, […] 莫大な利益のことしかもう考えなかった⁶³。」イギリスのフリゲート艦ラ・ベロス号が希望号を発見した時にはもはや希望号にはタマンゴただ一人しか生き残っていない。イギ

リス人たちは奴隷貿易の取り締まりに力を尽くすも、結果的に無力を露呈する。

終わりに

これまで見てきたように、たしかに「タマンゴ」では愚かであるか否かという観点から見た場合、黒人と白人は対立している。しかし、この作品では愚かな黒人たちも賢い白人たちもいずれも無力をさらけ出す。とすると、「タマンゴ」においては白人と黒人、すなわち文明と野蛮はどこまでも対立するとは言えないのではないだろうか。「タマンゴ」が提示するのは黒人と白人がどこまでも対立する世界ではなく、黒人と白人の差、文明と野蛮の対立が無化していく世界である。

注

本稿は2019年5月25日に成城大学にて開催された第72回スタンダール研究会において筆者が「メリメ『タマンゴ』における黒人と白人」のタイトルで発表した内容に修正と加筆を施したものである。

- 1 *Pierre Glaudes commente Nouvelles de Mérimée*, Gallimard, 2007, p. 100-121.
- 2 Antonia Fonyi, Notice à *Tamango*, in Prosper Mérimée, *Tamango, Mateo Falcone et autres nouvelles*, GF-Flammarion, 1983, p. 80. 本稿における引用文の邦訳は訳者名が明記されていない限り、筆者による。
- 3 Henri Martineau, *Petit dictionnaire stendhalien*, Le Divan, 1948, p. 172-173.
- 4 Maurice Parturier, Notice à *Tamango*, in Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, Garnier Frères, 1967, p. 282.
- 5 Pierre Pellissier, *Prosper Mérimée*, Tallandier, 2009, p. 546.
- 6 Léon Vignols, « Les sources du “Tamango” de Mérimée et la littérature “négrière” à l’époque romantique », *Mercure de France*, n° 708, 15 décembre 1927, p. 545.
- 7 Jean Mallion et Pierre Salomon, Notice à *Tamango*, in Prosper Mérimée, *Théâtre de Clara Gazul, Romans et Nouvelles*, Bibliothèque de la Pléiade, 1978, p. 1340.
- 8 Maurice Parturier, Notice à *Tamango*, p. 281.
- 9 Michel Crouzet, Notice à *Tamango*, in Prosper Mérimée, *Nouvelles*, t. 1, Imprimerie nationale, 1986, p. 369.
- 10 Pierre Trahard, *La jeunesse de Prosper Mérimée*, Edouard Champion, 1925, p. 78.
- 11 Jean Mallion et Pierre Salomon, Notice à *Tamango*, p. 1339.
- 12 マンゴ・パーク『ニジェール探検行』森本哲郎・廣瀬裕子訳、河出書房新社、1978年、p. 55-56.
- 13 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, éd. Maurice Parturier, t. I, Garnier Frères, 1967, p. 295-296.
以下、「タマンゴ」の本文を引用する際はこの版を使用する。この版は1850年の決定稿を採用している。なお、「タマンゴ」を邦訳するにあたっては、次の貴重な名訳を参照させていただいた。「タマンゴ 一八二九年」杉捷夫訳、『メリメ全集1』河出書房新社、1977年、p. 337-357.
- 14 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, p. 286.
- 15 David Eltis and David Richardson, *Atlas of the Transatlantic Slave Trade*, Yale University Press, 2010, p. 177, 179.
- 16 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, p. 298.
- 17 *Ibid.*, p. 302.
- 18 *Ibid.*, p. 304.
- 19 La note de Jean Mallion et de Pierre Salomon, in Prosper Mérimée, *Théâtre de Clara Gazul, Romans et Nouvelles*, *op. cit.*, p. 1356. (傍点は原文イタリック。) 同様の指摘は以下にもある。La note d’Antonia

- Fonyi, in Prosper Mérimée, *Tamango, Mateo Falcone et autres nouvelles*, op. cit., p. 102.
- 20 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, p. 304.
- 21 *Ibid.*, p. 293.
- 22 *Ibid.*, p. 301.
- 23 *Ibid.*, p. 303-304.
- 24 *Ibid.*, p. 288.
- 25 *Fictions coloniales du XVIII^e siècle*, L'Harmattan, 2005, p. 55.
- 26 *Ibid.*, p. 106.
- 27 Baron Roger, *Kelédor*, L'Harmattan, 2007, p. 5.
- 28 *Ibid.*, p. 25.
- 29 邦訳は河島英昭氏による。アズララ, カダモスト『西アフリカ航海の記録』岩波書店, 1967年, p. 529.
- 30 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, p. 291.
- 31 *Ibid.*, p. 302.
- 32 *Ibid.*, p. 304.
- 33 下線は引用者による。
- 34 *Ibid.*, p. 285.
- 35 *Ibid.*, p. 290.
- 36 *Ibid.*, p. 294.
- 37 *Ibid.*, p. 296.
- 38 *Ibid.*, p. 298.
- 39 *Ibid.*, p. 302.
- 40 *Ibid.*, p. 304.
- 41 *Ibid.*, p. 291.
- 42 *Ibid.*, p. 294.
- 43 *Ibid.*, p. 298.
- 44 *Ibid.*, p. 300.
- 45 *Le grand Robert de la langue française*, t. II, Dictionnaires Le Robert, 2001, p. 805.
- 46 Julien Joseph Virey, *Histoire naturelle du genre humain*, t. II, Crochard, 1824, p. 118.
- 47 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, p. 292-293.
- 48 *Ibid.*, p. 300.
- 49 *Ibid.*, p. 296.
- 50 Albert Dauzat, *Dictionnaire étymologique des noms de famille et prénoms de France*, Larousse, 1951, p. 211.
- 51 *Le grand Robert de la langue française*, t. II, p. 1686.
- 52 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, p. 294.
- 53 *Ibid.*, p. 296.
- 54 *Recueil général des anciennes lois françaises, depuis l'an 420 jusqu'à la Révolution de 1789*, t. XIX, Belin-Leprieur, 1821-1833, p. 500.
- 55 Voltaire, *Candide ou l'optimisme, Les Œuvres complètes de Voltaire*, t. XLVIII, The Voltaire Foundation, 1980, p. 195.
- 56 *Fictions coloniales du XVIII^e siècle*, p. 51.
- 57 La note d'Antonia Fonyi, in Prosper Mérimée, *Tamango, Mateo Falcone et autres nouvelles*, op. cit., p.

102.

- 58 La note de Michel Crouzet, in Prosper Mérimée, *Nouvelles*, t. I, *op. cit.*, p. 373.
- 59 La note de Jean Mallion et de Pierre Salomon, in Prosper Mérimée, *Théâtre de Clara Gazul, Romans et Nouvelles*, *op. cit.*, p. 1347.
- 60 Benjamin Constant, *Œuvres*, Bibliothèque de la Pléiade, 1957, p. 1340.
- 61 Prosper Mérimée, *Romans et Nouvelles*, t. I, p. 285.
- 62 *Ibid.*, p. 287.
- 63 *Ibid.*, p. 293.

(たど かなな 総合教育センター)